

## はじめに

もし、今、あなたの目の前に倒れている人がいたら、あなたは思わず駆け寄って助け起こそうとするでしょう。また、人間に限らず、さまざまな生物が我が子に対して示す愛情に、誰もが心温まる思いを抱いた経験があると思います。このような、他者に対する援助や愛情の感情こそが、看護学におけるケアの原点であると著者らは考えています。

近代科学の発展と共に医療が高度化・細分化することに伴い、看護者もスペシャリストとしての役割が追求されてきました。看護実践や看護学の進歩は、関連分野の学問としての専門性の深化にも貢献しました。専門性を追求した結果、残念ながら、現代の看護ケアは、看護の対象者の個性を考慮した「長期的に、病や障がいをもつ人と向き合うケア」よりも、病気の特性に着目した「短期的に、ある特定の病を治療するケア」に重きを置いて行われるようになりました。しかし、F. ナイチンゲールは、『看護覚え書』（1859）の中で、病気は回復の過程に過ぎず、人間が有する自然治癒力とのバランスが崩れた時に、病気という現象が発現すると述べています。つまり、看護ケアには、病気が発現してから治療するケアだけでなく、未病の段階で行われる病気を発現させないケアや、レジリエンス（回復力）を高めるために生活環境を整えるケアが必要であると捉えることができます。このような看護ケアは、日常生活と切っても切れない関係にあるだけでなく、看護の対象者の個性や生活様式によって柔軟に変化させる必要があります。すなわち、現代において求められている看護ケアは、短期的に病院の中で行われるケアだけではなく、ケアする側とケアされる側が地域で共に生活する過程で、語り合い、紡ぎ合う関係性の中で実践される物語であると著者らは考えています。

看護学や看護実践に関する著書は、多くの諸先輩方によってすでにさまざまなテーマで出版されており、精神看護学の分野でも多くの著書があります。そのような中で、本書の出版を考えた経緯について、はじめに述べたいと思いま

す。

著者の一人が心に秘めていた将来の夢は、考古学者になることでした。古代の人々が何を考え、どのように暮らしていたのかということに強い関心を抱いていたからです。この気持ちは今も変わりません。今、思えば、現代に生きる自分のルーツを探る道を求めていたのかもしれません。ところが、この夢は、実現することはありませんでした。両親が医療関係者になることを望んでいたからです。希望に反して入った看護の道でしたので、残念ながら学ぶ意欲が湧かず、看護に興味を抱くことができませんでした。

しかし、それでも年月が過ぎていき、気がつくと卒業し、国家試験にも合格して看護師として病院に就職することになりました。新人看護師として配属された病棟は、総合病院の成人混合病棟でした。そこには、終末期の看護ケアが必要な方々が入院されていました。今から40年前のことです。悪性腫瘍の疼痛に苦しむ方々を看護する日々は、看護技術の提供のみならず、人間観、看護観という自らの生きる姿勢が問われる日々でもありました。その方々のこれまでの人生が凝集されている最期の瞬間に立ち会うことも多かったからです。この時ほど、学生時代にもっと真剣に看護に向き合っておけばよかったと後悔したことはありませんでした。今でも、その頃に看護させていただいた方々を忘れたことはありません。十分な看護ケアができなかったことを申し訳なく思いながらも、この方々の看護ケアから多くを学び、それらを通して、看護の奥深さに初めて目覚めました。

そして、看護をゼロから学び直す覚悟を決め、3年間の臨床経験後に大学に入り直すことにしました。学部では、臨床経験が評価され、学生でありながら教える側の経験をする機会も得ることができました。学部を卒業したのちは大学院に進み、基礎看護学を専攻しました。日本文化を活かした看護理論構築に関心があったからです。修士課程修了後は、母校でもある日本赤十字看護大学の基礎看護学分野の助手として看護学の基礎教育に携わることになりました。樋口康子先生のもとで看護の科学論（ケアサイエンス）の構築を目指して、眠る間も惜しんで他の学問分野の文献を読み進め、研究活動を行った日々を懐かしく思い出します。

その後、子育てのために専業主婦となり、約15年間を子どもたちと過ごしました。しかし、その過程で、大きな危機に直面することになりました。いわゆる健康住宅と称する新築住宅に転居したことをきっかけに、家族全員に化学物質過敏症が発症したのです。化学物質過敏症は、建材などに含まれたごく微量な有機溶剤などの化学物質が原因となり、アレルギー反応や抑うつ症状などが発症し、次々と反応する化学物質が増えると共に、電磁波過敏症にも移行するという、まさに現代病ともいえる疾患です。今ではシックハウス症候群、あるいはシックビル症候群として知られるようにもなり、その頃と建築基準も変わりました。しかし、現在でも、この疾患が抑うつ症状を発現することはあまり知られていません。著者らも、その当時は、薬学や看護学といった医療に関する知識を学んでいたはずでしたが、化学物質過敏症についてはまったく無知でした。当時、小学生であった2人の子どもたちを含む家族全員に、抑うつ状態、希死念慮、五感の感覚喪失、記憶の欠如等の症状が発現しました。新居に転居して3年目のことです。家の床下から有機溶剤を取り除き、天然由来の建材に変えるために何度も改修作業を行い、有機栽培・無農薬の食材や衣類に変更する等、生活環境全般を変えるために奮闘しました。病から回復するために、新しい生活様式に変更せざるを得なかったのです。

その過程で、心身のつながりを痛感し、改めて精神科看護を学ぶ必要性から約15年ぶりに精神科の臨床に飛び込みました。その当時は、うつ病をもつ人への看護援助についての知見が少なかったからです。15年ぶりの臨床現場は、設立50年の歴史をもつ単科の精神科病院でした。その中で、精神障がいをもつ人の呈する精神症状に影響する治療的環境、とりわけ人的環境である看護者の関わり、それ自体が癒しにも治療にもつながることを経験しました。こうして、精神科看護においては、H. ペブロウが述べているようにcure（治療的ケア）とcare（看護的ケア）が同時に行われていることに気づきました。また、教育を担当する管理者として看護師の継続教育を実践する機会も得ました。さらに、理論と実践をつなぐ橋渡しを目指して、大学院博士課程で精神看護学を専攻することにもチャレンジしました。

大学院では、うつ病をもつ人の看護モデルの構築を試みました。その過程

で、①「自己」である人間と「非自己」である環境との循環（自己・非自己循環過程）に滞りが生じることで病が発症すること、②人間には自然治癒力や回復力（レジリエンス）があることを看護者が信じる必要があること、③問題解決思考だけでは問題が強調されてしまうため、人生に光がみえるようにストレングス視点を含む多視点の統合が大切であること、④小さな援助の積み重ねが大きな援助につながること、⑤病や障がいはいはそれ自体が人生において意味があること、看護の対象者との関わりの中から学ぶことになったのです。これらの学びを看護モデルとしてまとめ、2020年にはマンダラ看護理論として提唱しました。

ここで、前述の①は、生命理論である「自己・非自己循環理論」から看護へのアブダクションであると考えられます。②は、ストレス－レジリエンスのパラドックスを前提とした寄り添い（プレゼンス）の必要性を示唆しています。③は、パラドックスを前提として捉え方の枠組みを変えるリフレーミングによる新たな援助の方向性の出現への期待、④は部分と全体の関係性からの援助を示唆するフラクタルを前提とした看護の積み重ねの必要性、そして⑤は、意味論に基づく人生の再生・再構築と捉えられます。

7年間の精神科病院での臨床経験の後、再び看護基礎教育を行う機会を得て、精神科看護の基礎教育を担当することになり、今年で約10年目になります。臨床経験後に看護学を学び直し、さらに基礎看護学から精神看護学へと専門分野を変えた自らの経験が、看護を統合的観点から捉えることの重要性に気づかせてくれました。このこともアブダクションです。そこで、前任校では、身体・知的・精神の3障がいの看護を、障がい者看護として統一して教育を行いました。ユニークな教育内容でしたので、ぜひ、これらの教育内容を整理して残しておきたいと考え、本書の出版を企画しました。その後、さまざまなことが重なり、多忙な中で、なかなか思うように時間がとれない状況が続きました。そして、志から8年目にして、ようやく、今、形になりつつあります。

現在は、精神看護学を担当してはいますが、大学院教育では看護理論や質的研究方法も担当しています。「人間とは何か」「看護とは何か」「こころとは何か」と問いながら、人間が環境から学習することでさまざまな健康障がい

生じることや、看護の対象者の生活環境を整えることの大切さを伝え、語り合いたいと考え、日々の教育活動を行っています。このことは、まさに、ナイチンゲールが提示した看護の原点です。健康も病気も静止した状態ではありません。人と環境との語り合いから生まれるダイナミックな物語です。なぜなら、病気と健康は二極化したものではなく、健康の一形態が病気であり、病気と健康は循環すると捉えることができるからです。

今から10年前の3月11日に東北関東を襲った大震災と原子力発電所の事故、そして、2020年3月11日に世界保健機構（WHO）が発出した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック宣言等、私たち人類は、これまで経験したことのない惨事に直面しました。私たちは今、地震、豪雨などの自然災害や新たな感染症の世界的流行、国家間の紛争等に日々、翻弄されて生活しています。このような中で、メンタルヘルスの維持が困難となり、苦悩を抱える人々も増加しています。だからこそ、地域で生活していく人々と共に生き、その人々の人生を支援することを目指して、未来から考える看護学が、今、求められているのではないのでしょうか。

本書は、以下のように構成しました。

【第1章 未来から描くケア共創看護学】は、リフレーミングによる援助と癒しについて、絵を描くなどの実例を中心に記述しました。また、ストレングスに着目した看護の対象者の捉え方の意味についても述べました。

【第2章 自然科学と人間科学の統合】は、物質の科学である自然科学と、生命の科学である人間科学の相違を中心に、人間の認識の限界と特徴について記述しました。また、本書の基盤となる「自己・非自己循環理論」提唱の経緯についても触れました。

【第3章 人間と環境の共創による健康と病】は、人間が環境から学習することで発現する健康と病の関係について、化学物質過敏症などを例に記述しました。

【第4章 全体性を捉える直観の力】は、看護援助を行う上で大切な能力である直観力について、人間の無意識と行動の関係などに触れながら記述しまし

た。また、部分と全体の関係についても記述しました。

【第5章 回復力（レジリエンス）への信頼に基づく寄り添い（プレゼンス）】

は、意識の拡張としての健康の理論を提唱した M. ニューマン看護理論を中心に、環境から学習すること、寄り添う看護の重要性を記述しました。

【第6章 マンダラと構造主義】は、正解は一つとは限らないという観点に立

ち、主観主義と客観主義などの対立を超える学問における視点の転換の必要性を論じました。そして、認識を統合するシンボルとしてのマンダラ、それに構造主義について述べました。

【第7章 マンダラ看護理論とメタ認知的学習】は、マンダラ看護理論の概念

を中心にメタ認知的学習の意義、失敗からの学び、共創的コミュニケーション、語り（ナラティブ）の力について記述しました。

【第8章 未来から描く‘実物定義’の活用 ― 学習と脱学習の循環 ―】は、

パラドックス、フラクタル、アブダクションの特性と5段階 NECTE 過程との関係性を中心に論じました。そして、脳や心身の健康危機を乗り越え、社会的包摂を目指すための創造性リテラシーの育成について記述しました。

そして、【おわりに】では、一人ひとりの人生は人間と自然（環境）が共に語り合う物語であるという観点から、医療や看護において、過去の生活史をたどるだけでなく、未来から今を描くことの意義について記述しました。

各章は、つながりつつも、独立していますので、興味・関心のある章からお読みいただければと思います。また、内容に広がりを持たせるためにコラム等も多く取り入れました。病や障がいをもつ人への看護援助に関する教育においても活用していただければと思います。

哲学的な観点にご興味がある方は、拙著『未来共創の哲学』（2020、言叢社）をお読みいただければ幸いです。

本書が、この混沌とした世界に希望の光を灯す一助になればと思います。

令和3年7月吉日

村瀬 智子

未来から描くケア共創看護学  
— 自然・生命・こころ・技の循環 —

---

目 次

はじめに .....	i
------------	---

## 第 1 章 未来から描くケア共創看護学 ..... 1

1. リフレーミングー問題解決からストレングスの活用に向けてー 1
  - 1.1 問題解決志向による対処的看護 2
  - 1.2 ストレングスを活かした看護 3
  - 【コラム 1】 問題解決志向からストレングス志向へーリフレーミングの意義ー 4
  - 【コラム 2】 平衡状態に揺さぶりをかける援助 5
2. 問題発生のメカニズムを問題解決に活用するーリフレーミングの実践ー 6
  - 【コラム 3】 リンゴのストレングスモデル 9
  - 【コラム 4】 リンゴのストレングスモデルとケア共創看護学 10
3. 創造性と崩壊性を発揮する 5 段階 NECTE（ネクテ）過程の提唱 12
  - 3.1 奇跡を起こす実践例に学ぶー‘実物定義’の活用ー 13
  - 3.2 創造性とは何かー100 年におよぶ科学者たちの探究成果ー 15
  - 3.3 パンデミックと創造性ー自己超越的進化ー 16
  - 【コラム 5】 失敗からの学び、進化論、発達心理学の統合 17
  - 3.4 パンデミックと創造性ー危機への創造的対処ー 21
  - 3.5 危機対応と精神病理学的意味 22
  - 【コラム 6】 コロナ渦が教育を変える?! 24
4. 創造性を重視した看護ケア 25
  - 4.1 5 段階 NECTE（ネクテ）過程に基づく看護過程の活用 25
  - 【コラム 7】 あくびの感染ーちょっと、ひと息ー 27
  - 4.2 個別性に見られる一般性というパラドックス 28
  - 【コラム 8】 対立事象の共存ーコインモデルの意義ー 29
5. 問題発生メカニズムを問題解消に活用するー個別性と一般性の両立に向けてー 30
6. 自然の複雑性ー人間のリフレーミングを促す創造的直観力の必要性ー





- 3.1 研究方法の検討—帰納法偏重主義からの脱却に向けて— 84
- 【コラム4】「演繹」と「転移」(アブダクション)の意義—心理学的な意味— 85
4. 知の「構造」の発生過程—精神発達と科学史— 87
5. 汚染環境適応病の発症—病の「構造」の形成過程— 88
- 【コラム5】古くから知られていた「薬理効果の二相性と多様性」 90
- 【コラム6】フォン・ユクスキュルの『生物から見た世界』 90
6. 統一生命理論—自己・非自己循環過程としての生命— 92
- 6.1 主体(自己)と客体(非自己)の循環過程に基づく「構造」の構成—弁証法的発展過程— 92
- 6.2 環境因子の人体影響—「構造」形成過程としての環境適応病の発症— 93
- 6.3 セリエの一般(非特異的)適応症候群—疾患の統一理論への展望— 94
- 【コラム7】病気発症の一般理論 96
- 6.4 ランドルフの特異的適応症候群—人間環境学の提唱— 97
- 【コラム8】特異適応症候群の提唱への歴史 99
7. 多様性に潜む普遍性 100

#### 第4章 全体性を捉える直観の力 ..... 105

1. 自然科学の方法の適用範囲と限界 105
- 【コラム1】対立から統合へ—純粹経験の必要性— 106
2. 知識が目をもらせる? 107
- 【コラム2】東洋思想と西洋心理学 110
3. 創造性と直観 113
4. 「達人」の技 116
5. 教育の原点—全体性の探究— 118
- 【コラム3】変容を生み出すナースのプレゼンス(寄り添い)の技 121
6. 失敗から学ぶ未来思考を取り入れた革新的教育の可能性 122
7. アスリートの世界からの学び 124
8. 複雑システムとしての生命—逆説の力— 126
- 8.1 逆説—不安定性に基づく安定性— 126

【コラム 4】 不安定性による安定性の維持	128
8.2 逆説 — 成功探究と失敗からの学び —	129
8.3 逆説 — 創造的思考と模倣的学習 —	132
9. ピアジェの発達心理学 — 「外」と「内」の視点を統合する構造主義 —	135
10. 創造性を如何にして学び、如何にして伝えるか	136
10.1 逆説 — 「反事実」に基づく「事実」の確認 —	137
10.2 学習過程の課題	139
10.3 科学は失敗から学ぶ学問	140
10.4 目に見える世界と目に見えない世界 — 「反知識」に挑む —	141
【コラム 5】 感情プライマー効果 (Affective Priming Effect) とその意外な意味	142
【コラム 6】 西田哲学の「無の論理」とは	143
11. 新たな学術創成へ — 問題創発を用い、失敗することを前提とする —	144
12. 「生命とは何か」という問題に挑む	145
【コラム 7】 「生命」を理解する方法論	146

## 第 5 章 回復力 (レジリエンス) への信頼に基づく寄り添い (プレゼンス)

..... 149

1. 癒される人と癒す人の '間' にある寄り添い (プレゼンス)	150
【コラム 1】 病気と健康の捉え方	152
2. 自己・非自己循環過程による病気の発症と治癒	154
2.1 シンボルの意味	154
2.2 病気の外面化 — フロイトのヒステリー論 —	155
2.3 病気の外面化 — ユングの元型論 —	157
【コラム 2】 フロイトのヒステリー論とユングの元型論	158
3. プレゼンスにおける看護の専門性 — M. ニューマン看護理論を手掛かりに —	159
4. 他者に心を込めて寄り添うことができる理由	161
5. M. ニューマン看護理論の前提となる一般理論	162

6. 熟練看護師の看護観の変遷に見るターニングポイント	166
【コラム 3】 苦悩がもたらす成長の可能性	168
7. 病や障がいからの回復過程と看護観変遷過程のアナロジーと回復力（レジリエンス）	169
【コラム 4】 主体と客体の見方を統合するエスノグラフィー	170
【コラム 5】 ころとは何か—遺伝か、環境か、その両方か、あるいは?—	171
8. 芸術（アート）と科学（サイエンス）の共鳴	174
8.1 西田哲学の「表現の世界」	175
8.2 科学と教育におけるダブルバインド—コペルニクス的転換に向けた芸術の可能性—	177
8.3 ダブルバインド	178
8.4 創造的認識としての芸術と科学	179
8.5 アイン・ランドの芸術論	180
8.6 クライン派精神分析学の「対象関係論」	180
8.7 自己・非自己循環理論に基づく芸術・科学・精神病理論	183
<b>第 6 章 マンダラと構造主義</b>	187
1. 正解は一つとは限らない—なぜ、「創造力」が求められるのか—	187
【コラム 1】 がん研究の歴史—正解は一つとは限らない—	188
【コラム 2】 西洋科学の本質と限界—新たな「ものの見方」の必要性—	190
2. 心理学的な矛盾・葛藤	194
3. 東洋哲学の神秘	195
3.1 中国の「科学」	195
3.2 伝統的西洋科学での「想定外」問題は、東洋哲学では「自明」問題！	195
3.3 伝統的西洋科学の論理の枠組みでは、決して捉えられない複雑系世界	196
【コラム 3】 経験論的实在論（外向タイプ）と先験的観念論（内向タイプ）	197

4. 西洋の医学と東洋の医学	199
【コラム 4】 がんの自然治癒	201
【コラム 5】 ホスピタルアートが拓く「小さな扉」	202
5. 認識を統合する生命シンボルとしての「自己・非自己循環原理」— マンダラの秘密 —	203
【コラム 6】 意識と無意識	205
6. 構造主義	206
7. 身近な現象と構造主義	208
【コラム 7】 問題解決の切り札— 水平思考 —	210
【コラム 8】 創造性と現実世界— ユングの「タイプ論」に学ぶ —	211
【コラム 9】 「客観的」破局と「主観的」破局—「外」と「内」の現実性の解体—	213
8. 動的過程の自己相似性—ダーウィンによる自然選択説の提唱と再発見—	214
9. 新発見から超発見に向けて— 理論がもつ自己超越性 —	216
10. 構成的認識の理論と実践— 発生的認識論・進化論的認識論・原型論の統合 —	218
10.1 理論の概説	221
10.2 ピアジェによる「内」→「間」→「超」の発展原理	220
10.3 概念の構築	220
11. 構造主義再考	221
11.1 外の世界の構造	221
11.2 「構造」とは何か— 存在、認識、発展する過程としての「構造」—	223
11.3 ‘構造の認識’と‘認識の構造’— 弁証法的「無」の論理 —	224
11.4 構造の本質— 全体性・変換性・自己制御的閉鎖性 —	226
11.5 構造の具体例— 非連続の連続としての構造化の過程 —	227
【コラム 10】 構造の全体性・変換性・自己制御	229
【コラム 11】 構造主義の俯瞰的描像	230

## 第 7 章 マンダラ看護理論とメタ認識的学習 ..... 233

1. 心身と環境の循環を支える看護	233
-------------------	-----

2. マンダラ看護理論	234
2.1 看護理論の系譜	234
2.2 マンダラ看護理論の基盤となる一般理論と主要概念	235
2.3 マンダラ看護理論におけるメタパラダイム	236
3. マンダラ看護理論の教育への適用 — メタ認識的重要の意義 —	240
【コラム 1】 マンダラの秘密 — 木村敏氏のコメントに答えて —	241
4. 教育過程・病気の回復過程におけるメタ認識的学習	245
4.1 看護基礎教育課程におけるメタ認識的学習の例	245
4.2 看護学の卒後教育課程におけるメタ認識的学習の例	248
4.3 病気の回復過程におけるメタ認識的学習の例	250
4.4 事例における過程の統合から意味の抽出へ	252
5. 弁証法と認識内における対立的共存	253
6. メタ認識的学習—経験の記述から学習による説明・理論生成へ—	254
7. 教育過程におけるメタ認識的学習の意義—自己・非自己循環理論の視点から—	255
【コラム 2】 明暗を分けた2つの航空機事故	258
8. 成人期の学習におけるリフォーミングの実際	260
8.1 看護実践力を継続的学習で保持する過程例	262
 第8章 未来から描く‘実物定義’の活用—学習と脱学習の循環—……	268
1. 自然な学びのはじまり	269
【コラム 1】 伝承を拒む精神の宝	270
2. パラドックス（逆説）、フラクタル（入れ子構造）、アブダクション（転移）の特性と5段階 NECTE 過程	271
2.1 パラドックス（逆説）	272
2.2 アブダクション（アナロジー、転移・逆転移、‘翻訳’）	273
2.3 フラクタル（入れ子構造）	273
2.4 パラドックス、フラクタル、アブダクションの3つの特性の共演	274
3. 「奇跡を起こす統一」への期待	276

4. 20 世紀の感染症への勝利に続く、21 世紀の新たな感染症との闘いの始まり	278
5. 脳の健康危機 — アルツハイマー病 —	279
6. こころとからだの健康危機	280
7. 社会的包摂をめざすために必要な創造性リテラシー の育成	282
8. 歴史のダイナミズム	284
9. 創造的学びとこころの修練	287
10. 自己対話と自己・非自己対話	293
【コラム 2】 情動感染の二面性 — アブダクションの一形態として —	297
【コラム 3】 ダーウィンの自然選択説 — 理論構築による認識の発展 —	298
11. 学習と進化の相同性	300
 おわりに — 未来から描くケアの共創 —	304
 謝 辞	307
 索 引	308